雄勝城・駅家関連遺跡の発掘調査成果

高橋 学（雄勝城・駅家研究会）

はじめに

雄勝城は、『続日本紀』天平宝字２年〔758〕12月８日条に「坂東諸国から騎兵・鎮兵などを動員して桃生城と小勝柵を造らせている」とあり、翌３年〔759〕９月26日条に、「陸奥国桃生城と出羽国雄勝城を造営する」として国史上に登場します。

また、表題にある駅家とは、役人の往来や情報・文書の伝達のために、駅路（官道）沿いに原則として30里（約16km）毎に設置された公務旅行者（駅使）に対して乗用馬（駅馬）、休憩、食事、宿泊等を提供するための施設を指します。冒頭に紹介した『続日本紀』９月26日条の雄勝城造営記事に続いて、「始めて出羽国雄勝・平鹿の二郡と、玉野・避翼・平戈・横河・雄勝・助河并びに陸奥国嶺基等の駅家を置く」と記されており、雄勝駅家も存在していたはずです。ただし、雄勝城も雄勝駅家も所在地は未だ不明のままです。

雄勝城や関連する遺跡の探査を目的とした発掘調査は昭和36年に遡ります。秋田県教育委員会と羽後町教育委員会が主体となり昭和51年にかけて８度の発掘調査を行った羽後町足田遺跡群です。遺跡群を構成する城神巡り遺跡では竪穴住居跡や墨書土器が発見されるなど大きな成果はありましたが、遺跡群から発見された遺物をみると、その時期は古くとも平安時代の９世紀中頃、多くは９世紀後半から10世紀前半代となり、雄勝城が造られた奈良時代に遡る遺構・遺物は未確認でした。

また平成19年度からは、秋田県教育庁払田柵跡調査事務所が払田柵跡内の調査に加え、「払田柵跡関連遺跡の調査」を開始しました。この調査は現在も継続中の事業となっています。

そして報告者である高橋は、平成31年３月末の定年退職を契機として、翌４月に「雄勝城・駅家研究会」（以下、研究会）を立ち上げました。研究会は任意の民間団体であり、雄勝城や雄勝駅家、寺院等の関連する遺跡の所在地特定やそれぞれの遺跡が果たした役割を究明する目的をもっています。研究会の活動にあたり、本講座の後援団体でもある「造山の歴史を語る会」などの協力を得ながら進めています。

本報告では、払田柵跡関連遺跡の調査及び研究会が４年間にわたり行ってきた雄勝城解明に向けた発掘調査等について紹介します。

Ⅰ　払田柵跡関連遺跡の調査

払田柵跡の調査は、払田柵跡調査事務所が昭和49年度を初年度とし、５年毎の中期計画を策定して継続的な調査を毎年実施しています。平成16年度からの第７次５年計画では、払田柵跡内の調査に加え、「払田柵跡関連遺跡の現況調査及び情報収集」というテーマを新たに設定しました。このことは、平成元年に払田柵の外柵を構成する材木塀の杉角材を年輪年代測定した結果、西暦801年と同定され、外柵の成立時期すなわち払田柵の創建が平安時代の801年頃であることが確実となったことを契機とし、払田柵に先行する「雄勝城」等の所在地を探ることを念頭に置いています。

平成17年度には「関連遺跡の現況調査等」とする活動を開始し、18年度にかけて横手市雄物川町・大森町、羽後町域の踏査を行い、平成19年度から雄物川町造山・今宿地区を対象とし、試掘調査に入りました。現在まで９遺跡を調査しており、その概要を調査順に紹介します（第１図）。

（１）造山館跡（平成19・21年、造山字造山、造立神社裏手）

平成19年の調査で幅２ｍ以上、深さは0.7ｍの堀跡を検出。古代・中世の遺物はなく、時期は不明。平成21年にも堀跡を確認、推定幅４ｍ、深さ1.2ｍ。堀跡底面直上からフイゴ羽口片が出土。中世城館とされる造山館跡を試掘調査の対象としたのは、中世遺構の下層に古代の遺構が埋もれているのではないかという観点からです。

（２）造山遺跡（平成19・21年、造山字造山）

平成19年には市指定天然記念物「造山の傘杉（からかさすぎ）」の隣接地を調査し、検出遺構はなかったものの、８世紀代の土師器甕が出土。平成21年の調査により、竪穴住居跡、土坑、溝跡を検出。８世紀代の集落跡であることが判明。その他に中世の土坑や陶器（擂鉢（すりばち））が発見され、これらは南側に隣接する中世造山館に関連すると想定されます。

（３）栗林遺跡（平成19・28年、造山字栗林、造山公民館裏手）

平成19年の調査で溝跡や堀跡を検出、時期は不明。８世紀代の土師器を発見。ここは平成７年の雄物川町教育委員会による分布調査で８世紀代の須恵器坏と鉄滓が出土しています。

（４）十足馬場南遺跡（平成19・21年、造山字十足馬場）

調査事務所の試掘で新発見した遺跡。竪穴状遺構（住居跡か）と土坑を検出。出土遺物（須恵器・土師器）と併せて８世紀の集落遺跡として新規登録。平成21年の調査でも８世紀代の遺物が多く出土しました。

（５）首塚（こうべづか）遺跡（平成21年、今宿字高花、首塚神社の東側）

竪穴状遺構（住居跡か）と溝跡を確認。竪穴内から須恵器が出土していることから、古代の構築と見られるが、詳細な時期は不明確。ここからは、遺跡の地権者が畑の耕作中に採集した８世紀代の須

第１図　雄物川町造山地区の遺跡　　『秋田県遺跡地図情報』より

恵器・土師器があります。遺物は横手市雄物川郷土資料館に収蔵されています。

（６）造山Ⅲ遺跡（平成23年、造山字造山）

調査事務所の試掘で新発見した遺跡。検出遺構は、近世の竪穴建物跡と井戸跡があり、陶器（初期伊万里・唐津）が出土。古代の遺構は確認できなかったものの、９世紀代の二面硯（にめんけん）が発見されました。

（７）蝦夷塚北遺跡（平成24～27年、造山字蝦夷塚）

調査事務所の試掘で新発見した遺跡。検出した遺構は、竪穴住居跡、土坑があり、縄文土器・二面硯・土師器等が出土。竪穴は８世紀後半の構築であり、造山地区西端、蝦夷塚古墳群の北側にも奈良時代の集落が広がっていたことが確認されました。また、官衙や寺院等で使用されることが想定される二面硯は、横手盆地内では払田柵跡周辺に限られていましたが、本地区東側に位置する東槻（とうつき）遺跡（雄物川町東里字東槻）、前出の造山Ⅲ遺跡に次いで発見されたことの意義は大きいと考えます。

（８）猯袋（まみぶくろ）遺跡（令和元、３・４年、今宿字猯袋、雄物川高校東側）

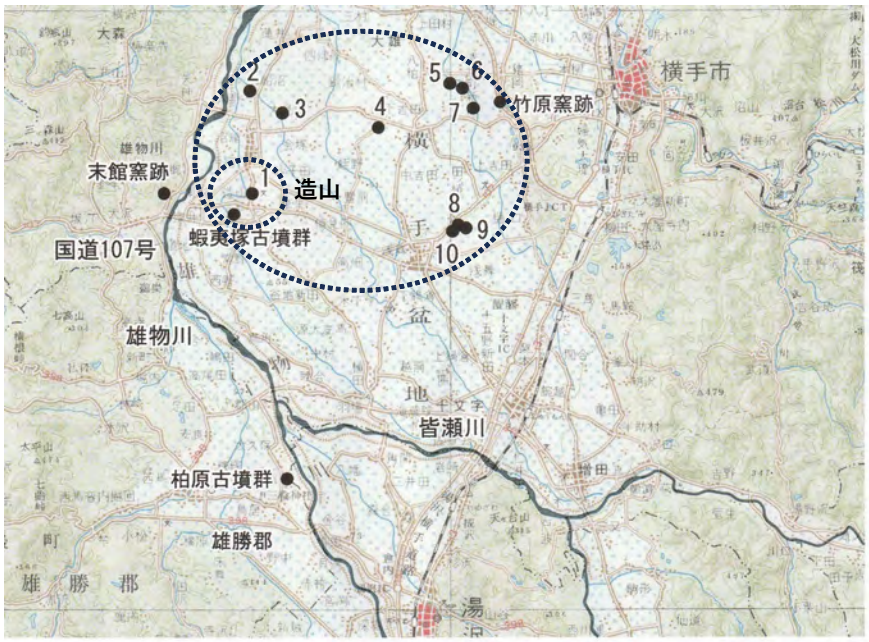
令和元年の調査では溝跡・竪穴状遺構・土坑等が検出され、主に８世紀代の土師器・須恵器等が出土。溝跡は２条が約10ｍの間隔で東西方向に平行して発見されました。２条の溝跡は、東側に隣接する東槻遺跡において平成18年にも検出されており、図面上では両者の２条とも同一直線上にのることが確認できました。令和３・４年の調査でも２条の溝跡が検出され、その総延長は約260ｍに達することが判明しました。

（９）十足馬場東遺跡（令和４年、造山字十足馬場、雄物川高校北側）

調査事務所の試掘で新発見した遺跡。検出した遺構は、竪穴住居跡２棟等があります。時期は８世紀代のようです。

２　研究会の活動開始から発掘調査へ

研究会としての最初の活動は、雄勝城が作られた奈良時代の遺跡がどこに位置するのかを確認することでした。雄勝城＝雄勝郡内（湯沢市・羽後町・東成瀬村）のイメージが固定化していますが、雄勝郡内における奈良時代の遺構を伴う遺跡は、実は羽後町大久保の柏原古墳群しかありません。ここでは円形周溝を伴う古墳64基が存在しますが、当該期の住居跡等は発見されていないのです。



第２図　横手盆地の奈良時代の遺跡

0　10km

それでは、横手盆地における奈良時代の集落遺跡はどこにあるのでしょうか。仙北郡内での１遺跡（払田柵跡の北西約４kmにある大仙市高関の諸又（もろまた）遺跡）を除くと第２図１～10として示した平鹿郡内（横手市）に集中するのです。したがって雄勝城は、上記の第２図点

線枠内のいずれかに存在していた可能性は高いことになります。そのなかでも報告者は枠内西限にあたる造山地区に雄勝城があったと見ています。雄勝城＝造山説です。その根拠としたのは、

①造山地区の東槻（とうつき）遺跡から円面硯、十三塚遺跡で丸瓦・平瓦が発見されていること

②奈良時代の集落遺跡の立地について

①について、円面硯は墨を擦る面が円形を呈しており、秋田城跡等の奈良時代の城柵からの出土に限られる遺物です。また瓦も一般的な集落から見つかるような類のものではなく、城柵や郡衙（郡役所）、寺院など当時の公的建造物の屋根に葺かれていた焼物なのです。横手盆地では801年頃に創建された払田柵跡とその近接する遺跡でしか発見例はありません。

②について、造山を除く他地区内の遺跡は、いずれも沖積面あるいは微高地上に立地する一方で、造山地区はさらに高い段丘面上にあります。生業との係わりから前者は水田稲作であり、後者が非水田稲作とすれば、後者の選択肢として、雄勝城等に係わりをもつ集団の居住地を含むと推定しました。

3　第１回発掘調査地の選定と結果

この前提を基に、雄物川町造山地内のうち地区の南西部、字蝦夷塚に所在する蝦夷塚古墳群を研究会としての最初の発掘調査地とすることにしました。

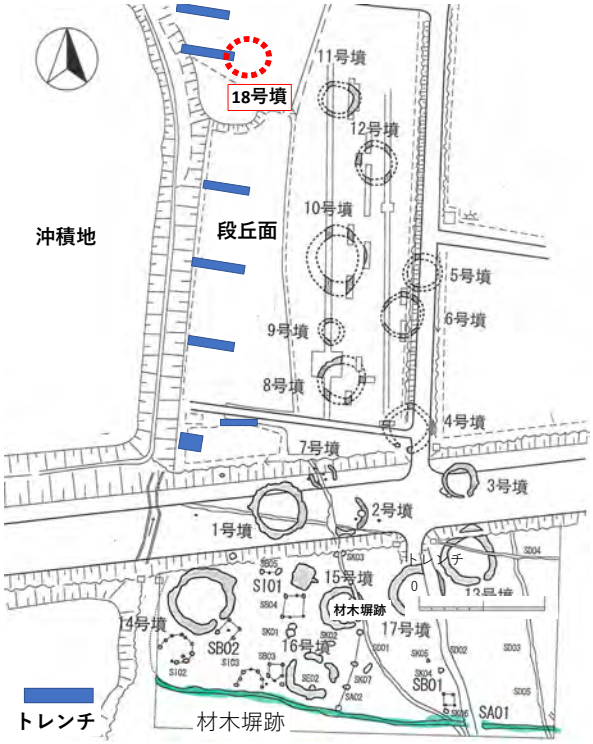
蝦夷塚古墳群に着目したのは、同遺跡から「材木塀跡」が発見されていたことにあります（第３図）。払田柵跡にもあるように城柵の外柵・外郭施設としての材木塀跡は、雄勝城と同時期に造営された桃生城跡（宮城県石巻市）の外郭でも検出されていることも大きなポイントとなりました。

古墳群は昭和60年と平成14年の２度、発掘調査が行われ、円形周溝を伴う17基等とともに材木塀跡も検出されました。これらが構築されたのは、出土遺物から８世紀中頃から後半であり、まさに雄勝城が造られた時期と重なります。

材木塀跡は、東西方向に延びる溝跡として検出され、溝底面に径15～40㎝の略円形の柱穴が確認できました。その長さは104ｍに及び、材木を建てるために掘り込まれた溝の幅は最大1.3ｍ、深さは0.6～1.1ｍです。柱穴のうち13本には木材が残されており、うち２本を樹種同定した結果、広葉樹のハリギリと判明しました。

柱痕跡が円形であること、材が広葉樹であることから、蝦夷塚の材木塀跡は、払田柵の針葉樹（スギ）・角材とは異なり、丸太材を一列に建て並べていた外観が想定できます。さらに、溝の幅や深さが払田柵跡と近似することから見れば、蝦夷塚に設置されていた丸太材の高さが３ｍを超していた可能性があ

第３図　桃生城跡と蝦夷塚古墳群の材木塀跡



第４図　蝦夷塚古墳群の調査

ります。それは払田柵材木塀の地上高が、角材の全長4.6m－溝の深さ１m＝3.6mであることから推測できます。

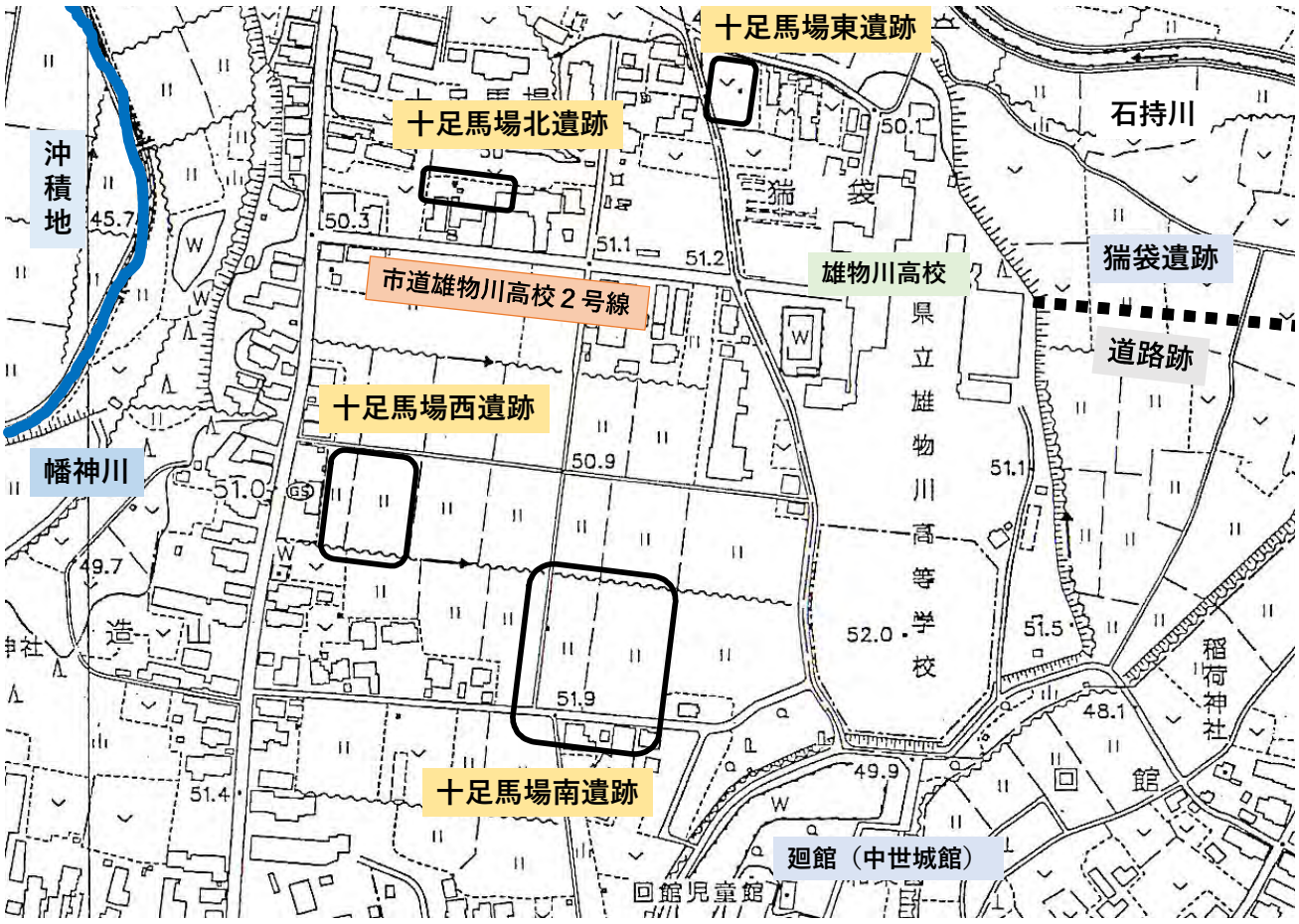
蝦夷塚古墳群の材木塀跡を城柵の外郭施設と仮定すると、その延伸施設（遺構）が発見できれば、雄勝城特定に一歩近づくことになります。そこで、想定される延伸区域、段丘面の縁辺部を対象とした調査（第４図、東西方向のトレンチ）を実施しました。令和元年10月、実働５日間の調査でした。

その結果、段丘縁辺部において南北方向に延びる材木塀跡など外郭施設となりうるような遺構の確認はできませんでした。しかしながら新たな古墳１基を発見できたことは成果と言えます。今まで計17基の古墳がありましたので、18号墳として登録しました。出土遺物等から雄勝城の造営時期に近い、８世紀代の築造が見込まれます。

４　第２・３回発掘調査地の選定と結果

第２回目となる令和２年は造山地区の北部、十足馬場（とあしばば）地内を対象とすることにしました。ここを選定したのは、前項で紹介した東槻遺跡と猫袋遺跡で検出の２条の溝跡が関係します。２条の溝跡を西側に延長させると、現在の雄物川高校正門から西側に延びる東西道路（市道、雄物川高校２号線）と一致し、このことから、高校正門前の東西道路とは奈良時代に成立した道路あるいは地割りが現在まで継続されているのではないかと推測しました。

この想定を受けて東西道路の周辺、地権者からの承諾を得ることができた２ヶ所（十足馬場Ａ・Ｂ地点、当時は遺跡としての登録はない地点）を発掘調査し、その結果をもってＡ地点は十足馬場北遺跡、Ｂ地点を十足馬場西遺跡として新たに登録することができました。令和３年の第３回目は、十足

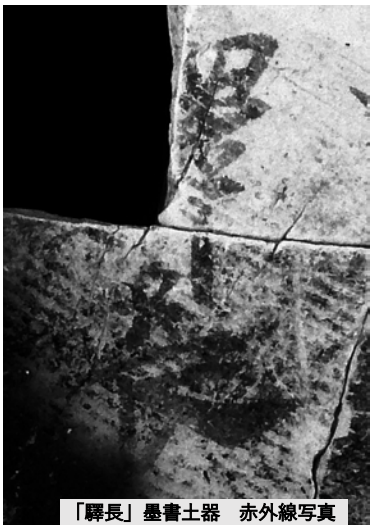


第５図　十足馬場西遺跡とその周辺遺跡

馬場西遺跡の追加調査を行いました。十足馬場北遺跡では、明確な遺構の検出はありませんでしたが、奈良時代の土師器や須恵器が出土しました。次に十足馬場西遺跡について紹介します。

５　十足馬場西遺跡の調査から読み取れること

令和２年11月と令和３年９月～10月の二度にわたる十足馬場西遺跡の発掘調査の結果、竪穴建物跡２棟、掘立柱建物を構成するであろう複数の柱掘形や土坑等が検出されました。その特徴は、各遺構の軸線方向が上記の東西道路、すなわち東－西方向に揃うあるいは直交していることです。出土した遺物は８世紀中頃～後半に限定され、払田柵が創建された９世紀代は含まれません。ここでは墨書土器１点に絞り、ここから読み取れることを報告します。


「驛長」墨書土器　赤外線写真

ＳＩ08とした南北9.0ｍ×東西6.4ｍの隅丸長方形を呈する大型の竪穴建物跡から出土した土師器坏には、底面に**「驛長」**と墨書されていました。坏はロクロ使用で底面を静止糸切り、内面黒色処理されたもので、秋田県内では初見の遺物です。おそらく陸奥南部（宮城・福島）から持ち込まれたと考えます。

驛長（駅長）とは表題に示した「駅家」を統括する人物を指します。

「驛長」の墨書土器が出土したことをもって、十足馬場西遺跡内に駅家が存在していたと判断はできません。しかしながら本遺跡周辺、造山地内に「駅家」が存在していた可能性は高く、とすれば「雄勝駅家」に他ならないと考えます。『続日本紀』天平５年〔733〕12月条に、「雄勝村に郡を建て民を居く」とあります。これが「雄勝」の地名の初見であり、条文の記述に従えば、奈良時代の733年以前から「雄勝村」は存在していたことになります。このことと、第２図に示した奈良時代の集落遺跡の分布範囲を重ねて見ると、造山周辺に「雄勝村」を構成する「村」があり、759年に至って造山地内に駅家が新設されるにあたり、ここに「雄勝」の名称が冠されることはなんら不自然ではないと考えます。

６　第４回発掘調査地の選定と結果

第２回・第３回と調査を重ねた結果を受けて、第４回目の調査も十足馬場地区に絞ることとしました。同地区内で地権者の了解を得られる地点を選定したところ、十足馬場西遺跡の南東約200ｍの休耕地（旧水田跡）を提供いただきました。そこは、平成19年と平成21年の２度にわたり払田柵跡調査事務所による「払田柵跡関連遺跡の調査」として行った十足馬場南遺跡の東側隣接地（同遺跡の範囲外）でした。令和４年９月～11月に行った調査の結果、奈良時代の遺構・遺物が発見され、十足馬場南遺跡の範囲が東側に拡大すると判断し、過去に２度の発掘調査を行ってきたことから、第３次調査として報告します。

第３次調査は、その調査地点設定にあたり対象地（休耕田）に地中レーダー探査（外部委託事業）を実施したことが大きな特徴です。

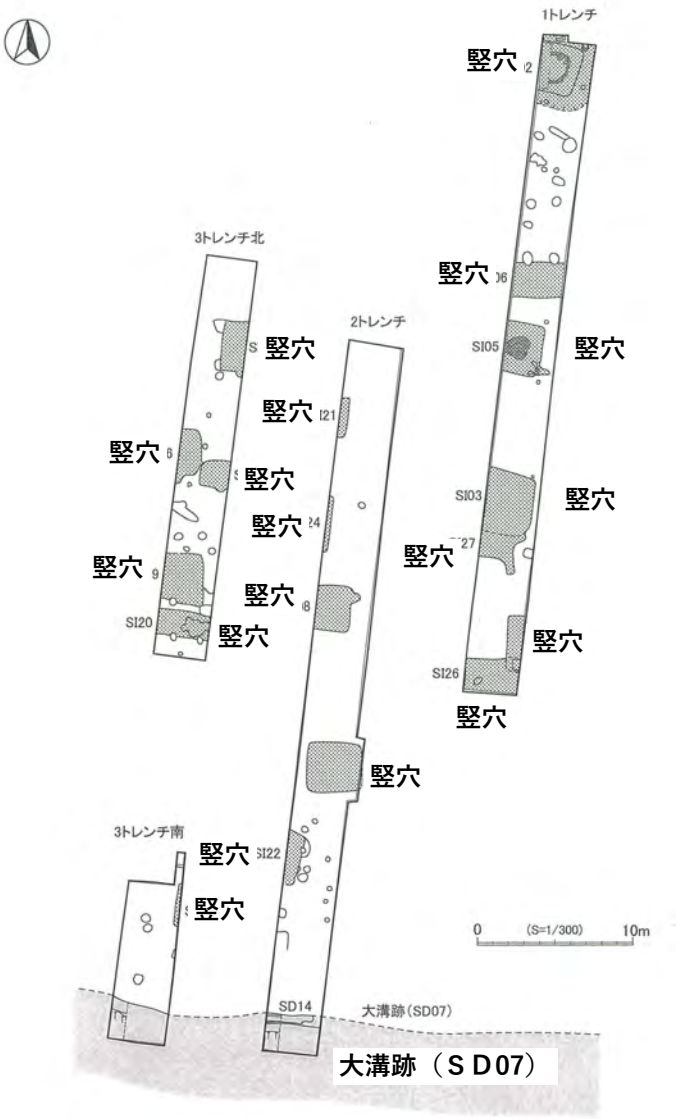
地中レーダー探査は電磁波を地中に向けて放射し、その反射波を測定することで、地中の様子を調査するものです。通常は水道管やガス管など地下埋設物の位置を特定するために用いられます。レーダー探査は南北方向５ｍ間隔で11本設定して実施し、遺構らしき反応が強かった３本にトレンチを設定することにしました。

調査により検出された遺構は、大溝跡（堀跡）１条、溝跡３条、竪穴建物跡（住居跡、竪穴状遺構を含む）18棟、土坑（柱掘形・柱穴を含む）45基、焼土遺構２基があります。

出土した遺物には、須恵器・土師器、鉄製品があります。その時期は、奈良時代の８世紀中頃～後半代であり、平安時代に入る９世紀代の遺物は含まれていないようです。

検出遺構としての最大の特徴は、大溝跡（堀跡、ＳＤ07）が発見されたことです（第６図参照）。地中レーダー探査においても東西方向に長さ35ｍ以上、幅３～５ｍ程の「掘り込み状の反射面」が想定されていました。堀跡と言えば、中世城館の空堀・水堀などを想像します。実際に調査区の近接地に中世の館跡（廻館、第５図）がありますが調査の結果、奈良時代の堀跡であることが確認できました。

現況での幅は3.5ｍ、深さ1.3ｍです。レーダー探査の分析結果と照合すれば、その幅は４～５ｍに達する可能性があります。奈良時代の大溝・堀跡の検出は、秋田県内では初見です。



第６図　十足馬場南遺跡第３次遺構配置図

７　十足馬場南遺跡の調査から読み取れること

現在、第３次調査の報告書作成にむけた整理作業の途上にあります。それでも現況でまとめると次のようになります。

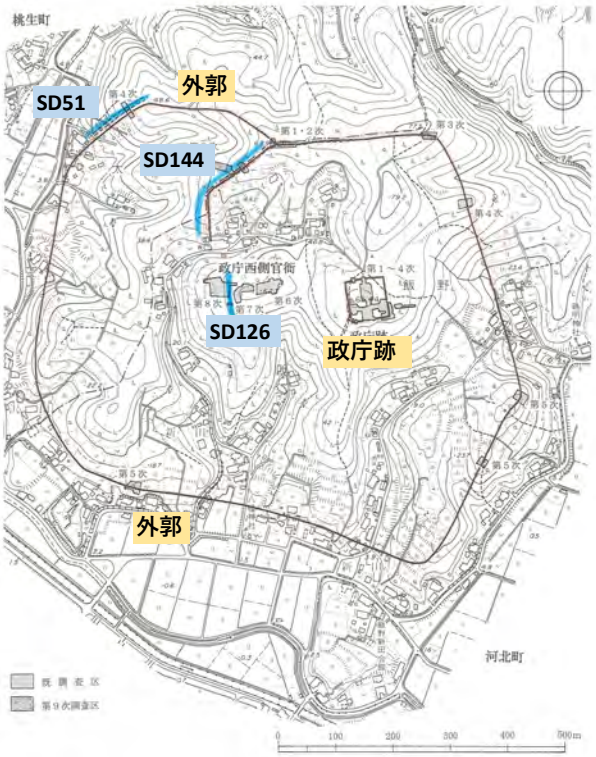
（１）大溝跡の発見

東西方向に延びる奈良時代の大溝跡（ＳＤ07）が発見されたことは大きく二つの意味があると考えます。

ひとつは当該期の大溝とは、城柵の外郭（外側の囲い）あるいは城内を区画する施設であるということです。雄勝城と同じく天平宝字３年〔759〕に造営された桃生城跡（宮城県石巻市）の外郭は、

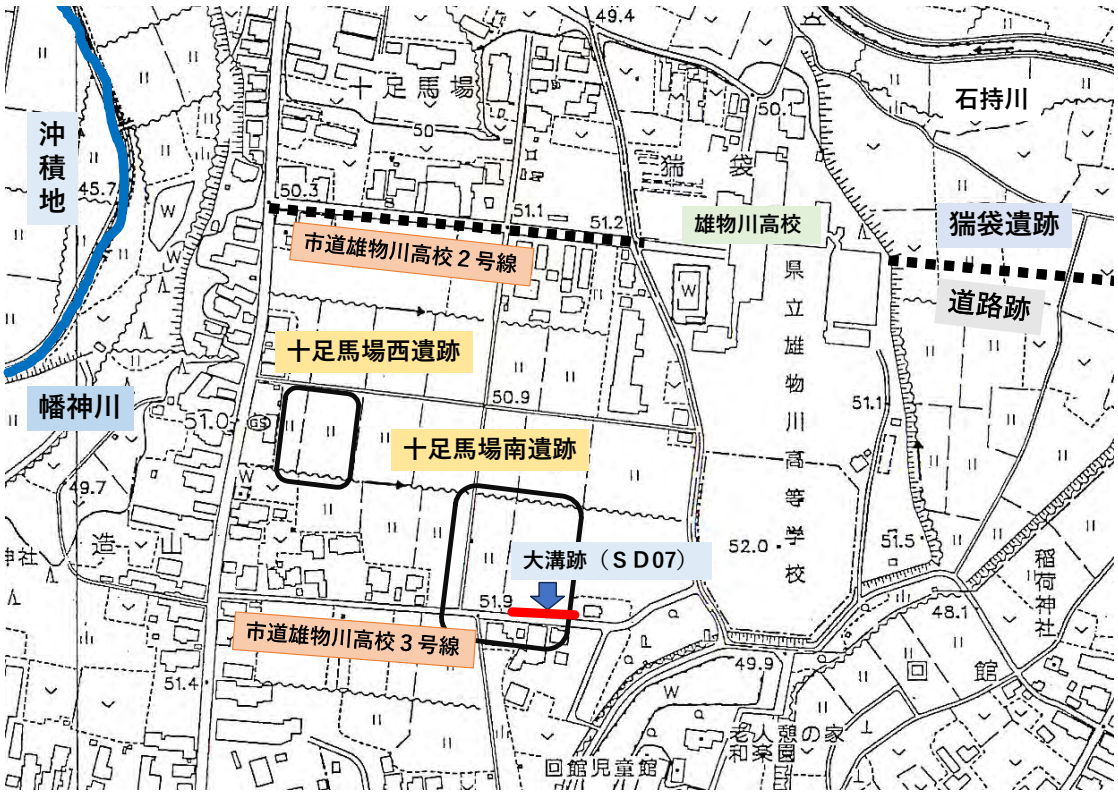
東西約800m、南北約650mの不整方形を呈しており（第７図）、築地塀（ついじべい）・土塁・材木塀と大溝から構成されます。大溝は、築地塀・土塁・材木塀の外側に巡ります。外郭北辺西隅の大溝跡（ＳＤ51）は、築地塀の外側に位置し、その上幅3.7m、深さ1.3m、断面Ｕ字形と報告があります。また、城内北部を東西方向に区画する大溝跡（ＳＤ144）は、上幅3.6～4.4m、深さ1.2mで断面形は逆台形状と記されています。さらに政庁域西側にある官衙（役所）域の建物群は南北方向の大溝（ＳＤ126）により東西に分けられます。ＳＤ126は上幅4.3m、深さ0.9m、断面形は逆台形です。兄弟城柵とも呼べる桃生城跡での事例を参照にすれば、今回発見された大溝跡とは外郭あるいは城内を区画する施設の一部と推定ができるのです。

もうひとつは、大溝跡（ＳＤ07）が検出された位置にあります。ＳＤ07は調査区南端にある東西道路（第８図参照、市道雄物川高校３号線）の北側に沿うように延びています。前述した東槻・貒袋遺跡で確認された道路側溝あるいは地割り溝跡は、市道雄物川高校２号線と一致します。現在の両市道は東西方向に平行して走っており、その距離は図面上の計測で240mあります。これは古代の尺に換算すれば800尺となるのです。



第７図　桃生城跡の外郭と大溝跡

複数地点で発見された溝・大溝跡の配置から、十足馬場地内の道路や水田等区画とは奈良時代に成立した地割りが現在まで維持されていると判断してよいと思われます。



第８図　十足馬場地内の道路跡と大溝跡

（２）多くの竪穴建物跡が語ること

大溝跡の北側から発見された竪穴建物跡あるいは竪穴状遺構は少なくとも18棟あります。これらの竪穴は、８世紀中頃～後半の構築であること、比較的小型で軸線が揃うこと、出土遺物に占める土師器の比率が圧倒的に高いこと、重複や位置をみれば大きく２時期であることを前提とすれば、雄勝城あるいは関連施設の構築（創建）あるいは改築時における造営作業を担った“労働者・工人等の居住施設”とみなすことが妥当ではないでしょうか。

（３）関東系土師器坏の出土

本遺跡を含め造山地区から出土した奈良時代の土師器坏は、緩やかに内弯しながら立ち上がる椀形を呈し、外面はミガキやナデ、内面はミガキのち黒色処理された個体（内黒土師器）が多いのが特徴です。外面の色調は黄褐～暗褐色を示す地元（在地）の土器と言えます。成形にあたりロクロは使用していません。

ところが数は少ないのですが、今回の調査では器形や調整、胎土を観察すると明らかに異質の坏が10数点含まれていました。専門家の方に見ていただいたところ、これらの土器については「関東系土師器坏」であり、関東方面から持ち込まれた可能性が高く、しかも３種類がありそうです。

①　体部から口縁部に至るところで屈曲し、その器面調整にケズリを多用する個体です。外面の色調は赤褐～明褐色を示し、内面に黒色処理が認められません。ロクロ不使用。北武蔵（埼玉北部～群馬）で多く認められるもののようです。

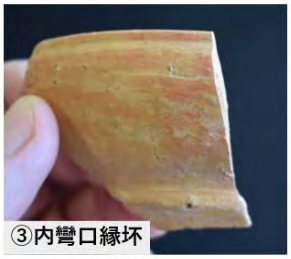
②　一片だけですが、ロクロ使用の坏と見られ、体部下半～底部にケズリが加えられます。内外面ともに赤彩されます。これは南武蔵（東京～神奈川）において８世紀前半～中頃を代表する土師器である「盤状坏」と呼ばれているもののようです。「盤状杯が出土する集落は、国府設置や国分寺造営に伴う「インフラ整備」の一環として寄せ集まった（あるいは寄せ集められた）ものである可能性が高い。従って盤状杯が出土する竪穴建物は、工房と考えることが可能なことを指摘するに至った」（青木 敬2001「盤状杯と古代の集落」『土壁』第５号 考古学を楽しむ会）とする論文があります。

③　口縁上部が内彎（ないわん）し体部下半に稜をもち、内外面に丁寧なミガキが施される坏です。下野（つもつけ）（栃木）で出土例がある「内彎口縁坏」と呼ばれるもののようです。

①の北武蔵坏は秋田城跡で数個体出土していますが、②③の資料は県内では初出のようです。

①北武蔵型坏

②盤状坏


③内彎口縁坏

関東系土師器

いずれにしろ、北武蔵・南武蔵・下野という板東諸国の土師器が造山地内に持ち込まれていることは、冒頭に紹介した史料、『続日本紀』天平宝字２年〔758〕12月８日条にある「板東諸国から騎兵・鎮兵などを動員」して小勝柵（雄勝城）を造らせているとの記述を裏付ける資料となるものと考えます。

おわりに

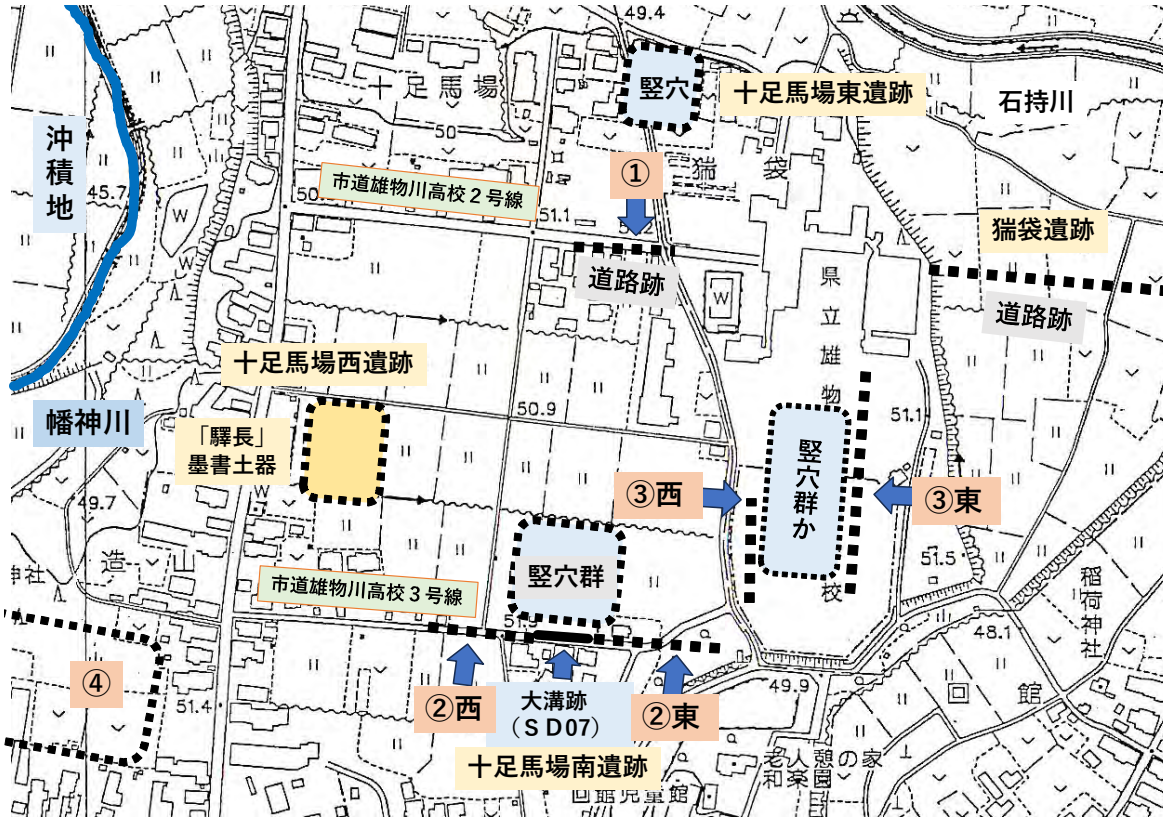
令和５年４月には、造山地内を対象とした二度目の地中レーダー探査を実施しました。令和４年のレーダー探査の成果とあわせて見ると以下の推定ができます。

①　市道雄物川高校２号線南側の休耕地（旧水田、第９図↓①地点）を対象に南北方向の探査を行った結果、長さ５～６ｍ程の「平坦な反射面」とその南側に「掘り込み状の反射面」が検出されました。この場所は、東槻遺跡と猫袋遺跡で検出の２条の溝跡（溝間の幅約10ｍ）の真西方向にあたることから、「平坦な反射面」は道路面本体、「掘り込み状の反射面」は道路南側の側溝の可能性があります。このことから現在の市道（幅員６ｍ）とは奈良時代に作られた推定幅員10ｍ道路の北側部分を利用していたと想定できます。

②　十足馬場南遺跡の大溝跡（ＳＤ07）については、遺構検出地点の東側と西側にも直線的に延びており、その長さは少なくとも180ｍに渡る可能性が高いことが推測されました（第９図↑②東、↑②西）。

③　雄物川高校野球場・グランドでの探査の結果、南北方向に延びる「掘り込み状の反射面」が２条（第９図←③東、③西→）とその間にも「掘り込み状の反射面」が複数確認できました。２条は60ｍの間隔で並行していること、大溝跡（ＳＤ07）と同等の反射パターンと規模であることから、これらも大溝跡であったと推測できます。また、２条の間で確認の反射面は大溝跡（ＳＤ07）の北側で発掘された竪穴建物等の遺構の可能性があります。従って大溝で南北に区画された内部に竪穴建物が配置されていた景観が想定できます。さらに、西側の③西は、東西方向の大溝跡（ＳＤ07）、②東とＬ字で接続していた可能性もあります。

④造山地区西側、造立神社東側（造山館跡周辺）のレーダー探査では遺構と推定できる反射パターンは検出されませんでした（第９図左下④）。



第９図　発掘調査と地中レーダー探査から推測される遺構